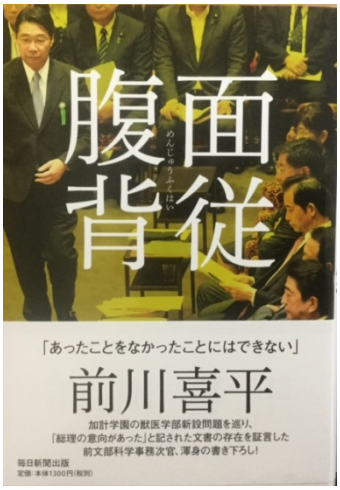
面従腹背

写真は2018年6月刊行の注目の前川喜平さん単著。本のタイトルは表紙カバー裏に、面従腹背(めんじゅうふくはい)表面は服従するように見せかけて、内心では反抗すること。―「広辞苑」と。



前川さん講演を今年3月31日にリバティおおさかで聴いた。本書を読んで、前川さんの人柄と教育観を再確認できた。紹介したいことは多いが、本書タイトルにかかわる「はじめに」のさいご「面従腹背しながら進む」にとどめたい。

公務員は「全体の奉仕者であって、一部の奉仕者ではない」(憲法15条2項)。本当の意味で「全体の奉仕者」になるためには、一個人であり一国民である自分自身に正直にならなければならない。一個人として自分は何を国に求めるか、一国民として自分はどのような国を望むか、そこを基点としてしか国民全体の幸福を考えることはできないのだ。

「面従腹背」は、あるテレビ局のインタビューを受けたときに、私の座右の銘だと言って口にした言葉だ。実際に、私は38年の公務員生活においてさまざまな局面で面従腹背してきた。一個人として、一国民として、全体の奉仕者として自分が進むべきだと思う方向が、組織の進む方向とは異なるとき、そして自分の力では組織の動く方向を変えられないとき、取るべき道は組織に従って残留するか組織に従わず離脱するかの二者択一になるだろう。組織に残る以上は面従せざるを得ない。しかし自分の裁量の及ぶ限りでは自分の考える全体の利益に近づくよう努め、機会が来れば組織の方向そのものを転換しようという思いを抱いているという意味で腹背する。私は、組織と対立したり、組織から離脱したりすることなく、あくまでも組織に残り、面従腹背を繰り返しながら、文部科学省という組織の中で行政の進むべき方向を探し続けてきた。

2017年1月に文部科学省を退職してからは、加計学園問題で安倍晋三首相の「ご意向」により公正・公平であるべき行政が歪められたことについて発言し、また安倍政権の教育政策や改憲案を批判してきた。私に「職務命令」を発する上司はいなくなったのだ。退職して、私は表現の自由を最大限に発揮することができるようになった。もう面従も腹背も要らない。その代わり、国の教育行政をその内側から動かしていく立場を失った。今は在野の立場で働きかけることができるだけだ。

本書は、私の38年に及ぶ文部省・文部科学省における公務員生活を振り返り、自分の理想と組織の現実との矛盾や相克の経験、すなわち面従腹背の日々を思い出すままに書き連ねたものである。

(2018年9月14日)